

現行民法典を創った人びと（4）主査委員 1：末松 謙澄・伊東巳代治，外伝1：司法省法学校正則科第2 期生と賄征伐

七戸，克彦
九州大学大学院法学研究院教授

<https://hdl.handle.net/2324/15931>

出版情報：法学セミナー．54（8），pp.87-89，2009-08-01．NIPPON HYORONSHA
バージョン：
権利関係：



主査委員①——末松謙澄・伊東巳代治

九州大学教授 七戸克彦

末松謙澄 (1855-1920)

1 伊藤博文の「四天王」の最古参にして娘婿である末松謙澄²⁾

は、法律家というよりは、文筆家としての傑出した才能によって世に出た人である。安政2年8月20日小倉藩領の豊前国京都郡前田村(現・福岡県行橋市)の大庄屋・

末松房澄の四男として生まれた彼は、明治4年17歳で上京、翌5年東京師範学校に入学するが、大学南校教師フルベッキの書生であった高橋是清にそそのかされて19歳で退学、高橋と2人でフルベッキ宅の英字新聞を翻訳して新聞社に売り込み生計を立てるという、青年時代にありがちな破滅的な途を選ぶ。だが、その縁で明治7年日報社(東京日日新聞の発行会社)に入社、主筆・福地源一郎(桜痴)の下で書いた論説が伊藤の目に留まり、翌8年正院御用掛となった後は主に法制局に務めたが、明治10年には西南戦争の征討総督本営付となる。これは謙澄の文才に目をつけた山県有朋の引き抜きであり、名文の誉れ高い山県の西郷隆盛宛降伏勧告状³⁾も、一説には謙澄作ともいわれる。

だが、伊藤は、この才能ある青年を、洋行を餌に自己の幕下に引き戻す。結果、彼は、明治11年英国公使館付一等書記見習として渡英、明治15年ケンブリッジ大学に入学。彼の才能はここで一挙に開花し、ロンドンのトゥッナー社から『源氏物語』の英訳(抄訳)を出版したほか、パイロンやシェリーの詩を漢訳して、郵便報知新聞に掲載している。

2 なお、末松が渡英した頃、ロンドンには、後の法典調査会メンバーである入江(穂積)陳重、岡村輝彦(いずれも文部省派遣第2回留学生として明治9年に渡英)のほか、馬場辰猪・菊池大麓・南条文雄らがいた。末松は、穂積らの日本学生会に入って毎月の例会に参加するようになり、同い年である穂積との人脈は、この時に築かれた。

明治19年の帰朝後、21年には日本初の文学博士となり(なお、このとき穂積も法学博士号を授与されている)、翌22年には伊藤博文の二女・生子と結婚、明治23～27年には衆議院議員となる一方、明治25年9月～29年9月には法制局長官を務め、法典調査会



第2回総選挙出馬時の選挙用写真
(明治27年3月、39歳)¹⁾

設置に先立つ明治26年3月21日首相官邸での相談会の召集や⁴⁾、明治29年2月26日衆議院提出の民法前3編の理由説明を行っている。なお、末松は、法典調査会の副総裁も当然自分になるものと自任していたため、伊藤が西園寺公望を副総裁に据えたことで、大いに失望したという⁵⁾。

3 今日の政治家の派閥人事と同様、伊藤派の幕閣である末松も、明治31年第3次伊藤内閣では通信大臣、明治33～34年第4次伊藤内閣では内務大臣となるも、山県有朋による伊藤追い落としの結果失職する⁶⁾。その後、伊藤から立憲政友会総裁を引き継いだ西園寺も、山県派(桂太郎)への配慮から、明治39年第1次西園寺内閣に、末松ら伊藤派の重鎮を入閣させず、政界復帰の夢を絶たれた末松は、同年3月事実上の隠居職である枢密顧問官に就任、以後は『防長回天史』編纂の傍ら、ローマ法研究にも手を伸ばし、大正7年には法学博士まで取得するが、その手ほどきをしたのは、英国留学時代からの知己である穂積陳重であった⁷⁾。

1) 『写真出典』玉江彦太郎『若き日の末松謙澄——在英通信』(海鳥社、1992年)197頁。

2) 誰も本来の読み「のりずみ」で呼んでくれないので、自分でも鞆に『K. SUEMATSU』と書くようになった。玉江・前掲注1)65頁。

3) さしあたり、司馬遼太郎『翔ぶが如く(中)』(文春文庫、2002年)250頁以下参照。なお、同書・160頁以下には、ほんの端役ながら末松も登場する。

4) 穂積重遠『続有閑法学』(日本評論社、昭和15年)243頁「民法起草記念書翰集」第1 末松長官書面。

5) 小泉策太郎(筆記)＝木村毅(編)『西園寺公望自伝』(講談社、1949年)112頁。

6) さらに末松の配下である中根重一(夏目漱石の妻・鏡子の実父。行政裁判所評定官から内務省地方局長)も失職し、その後、没落した重一は、漱石に経済的援助を求めながら貧困のうちに病死する。

7) 穂積は、末松謙澄(訳註解)『ガイウス羅馬法解説』(帝国学士院・有斐閣、1915年)の原稿の添削まで行っている。大正3年9月11日付穂積発末松宛書翰『末松子爵家所蔵文書(下)』(ゆまに書房、2003年)47頁以下。

伊東巳代治(1857-1934)

1 藤門「四天王」の謀将・伊東巳代治が伊藤博文に見出された経緯は、末松謙澄とよく似ている。安政4年5月7日長崎町年寄書物役・伊東善平の三男として長崎酒屋町に生まれた彼は、7歳でフルベッキについて英語を学び、当初



日清戦争当時の伊東(38歳)⁸⁾

は明治4年(14歳)工部省電信寮の選抜試験に合格して電信技師となったが、明治6年退職して神戸で発行されていた英字紙『兵庫&大阪ヘラルド』に入社後、その英語能力により兵庫県の六等訳官に採用され、明治8年には弱冠18歳で外務副課長となった。しかし、県庁の内紛に巻き込まれ翌9年に退職、前県令の神田孝平を頼って上京し、その食客となっていたところを、語学の才能を認めた伊藤に拾われて明治10年工部権大録の職を得てからは、11年内務省二等属、13年太政官権少書記官、14年参事院議官補兼書記官と累進し、明治15~16年の伊藤の欧州憲法調査に随行した後、明治18年初代首相となった伊藤の下で、金子堅太郎とともに初代の首相秘書官、明治21年伊藤が首相から枢密院議長に転ずると、枢密院書記官兼枢密院議長秘書官に就任、明治23年開設の帝国議会で伊藤が貴族院議長に就いた後は、貴族院議員にも選ばれ、伊藤の懐刀として縦横の働きを見せるようになる。

2 憲法制定に大いに貢献した伊東であるが、正規の法学教育は受けていないため、法典調査会での発言に、見るべきものは少ない。現行民法典制定に関する伊東の貢献は、稀代の策士としての特異な才能を存分に発揮して、世論操作・議会操縦を行った点にある。早期よりマスコミ(この時代はもっぱら新聞であるが)の影響力を見抜いていた伊藤は、明治24年伊東を東京日日新聞(日報社)の社長に送り込んで御用新聞化し、法典論争につき延期の方針を示唆するなどの情報操作を行っていたが、法典調査会での審議が始まって以降、同新聞は、今度は条約改正・法典制定の方向で世論誘導を行うようになる。一方、明治25年には民党に対抗して自ら新党結成を画策するなど、議会政治における政党の重要性を認識していた伊藤の下で、伊東は、陸奥宗光以後における、伊藤政権と自由党との間の重要なパイプ役を担うようになった。さらに、貴族院に関しても、最

大会派である研究会の領袖・千家尊福を通じて工作を行うなど、伊東は、伊藤政権の「影の宰相」としての手腕を振るうようになる。

3 だが、伊藤は、こうして実力を蓄えた伊東の野心とプライドの操縦に失敗した。明治31年第3次伊藤内閣の組閣時、所望する閣僚

ポストを伊藤から問われた伊東は、「私が自ら考へて、最も適任なりと信ずる地位は総理大臣であります。併しそれは既に閣下と定まって居ることであるから致方が無い、其の外には何の望むところもありません、一切閣下に御任せ申します」と返答している⁹⁾。しかも、伊東はこのとき得た農商務大臣のポストを3か月で捨ててしまう。伊藤の命を受けて自由党との提携交渉を進めたにもかかわらず、伊藤が井上馨蔵相の反対に押し切られて板垣退助の入閣を断念したため(井上は大の板垣嫌い)、面子を完全に潰されたのである。さらに、明治33年の政友会設立の際にも、外様の新参幕僚である渡辺国武に差配を奪われた伊東は発起人を辞退、伊藤との関係が決定的に破綻した彼は、明治36年、桂太郎・山県有朋と結んで、伊藤を枢密院議長に迫りやる謀略に出た。天皇の諮詢機関である枢密院に入るには、政界引退が前提であったことから、伊藤の政治生命を絶つとともに政友会の瓦解を狙ったのである。だが、これに対して、伊藤は、山県有朋・松方正義の両元老を枢密顧問官に起用し、自らの巻き添えにってしまう。他方、伊藤の後任の政友会総裁には西園寺公望が就任し、政権は桂园時代へと世代交代した¹⁰⁾。

4 一方、農商務相辞任後の明治32年以降、山県の推挙で枢密顧問官となって雌伏していた伊東にもまた、政界復帰の見込みはなかった。以後、彼は、盆栽と蓄財に勤しむ一方、冥界の枢府から政界への干渉に執念を燃やし、歴代内閣の鬼門と称された。

8) 〔写真出典〕『伯爵伊東巳代治(II)』(晨亭会、1938年)248頁。

9) 前掲注8)287頁。

10) 以上の伊東巳代治の伊藤博文に対する愛憎相半ばする思いを活写した著作として、佐々木隆『伊藤博文の情報戦略——藩閥政治家たちの攻防』(中公新書、1999年)。

外伝①——司法省法学校正則科第2期生と賄征伐

1 前号「富井政章」の項で、彼には明治9年7月の司法省法学校正則科第2期生の入学試験を受験した記録を見出せないと述べたが、別の人物と記憶違いしていた。花房吉太郎＝山本源太(編集)『日本博士全伝(全)』(博文館、1892年)63頁には、東京外国語学校在学当時「君〔＝富井〕学友某ト共ニ司法省法学生徒ノ試験ニ応ジ不幸ニシテ落第セリ是ニ於テ慨然遂ニ洋行ノ志ヲ決ス」とある。

2 なお、志願者800名とも2000名ともいわれる第2期生入試の合格者104名の中には、後の法典調査会のメンバーが5人含まれているが(小笠原貞信・河村讓三郎・小宮三保松・寺尾亨・富谷播太郎)、1位合格は吉原三郎(1854-1916)、2位は原^{はら}敏^{たかし}(1856-1921)であった¹²⁾。しかし、原は明治12年2月8日に退学処分を受けてしまう。退学理由に關しては、「ナポレオンの写真を所持していたため」との伝説があるが、真相は次のようなものであったらしい¹³⁾。

富井にしろ梅にしろ、東京外国語学校に進学し、あるいは司法省法学校を目指した理由は、これらの学校生徒には給与や衣服等が支給された点にある。食事代も支給され、司法省法学校の寄宿舎では、朝はパンにスープと鶏卵、昼は洋食一品、晩には日本食が出されたが、事件は、原ら第2期生が入学した2年目(明治10年)頃から飯の量が少なくなったことに端を発する。一人の生徒と賄^{まかない}との間の「飯を持ってこい」「もうない」との口論から、20名ばかりの者が「炊くべし炊くべし」と大騒ぎを始めた。明治期以降の寄宿舎でしばしば発生した「賄騒動(賄征伐)」の勃発であり、若者の食欲は、げに恐るべきものである。これに対して、当時の校長・植村長(薩摩出身)は上記20名の生徒に2週間の禁足処分を言い渡したが、生徒の側では禁足処分には服従するが心服はしないと回答、これもまたいかにも青年らしい反抗の仕方だが、しかし、その結果、賄問題は一転して心服する・しないの精神論となり、心服を頑強に拒んだ秋月左都夫・福本巴(日南)・坪根直吉・加藤恒忠の4名は放校処分を受けてしまう。これに憤慨したのが、賄騒動には加わらなかった原



仏国公使書記官時代(明治18～19年)の原敬(29～30歳)¹¹⁾

と中田実^{くがかつなん}(陸羯南。1857-1907)で、この義憤もまたいかにも青年らしいが、彼らは第2期生全員を食堂に召集し、委員に選出された原・陸と当時首席であった河村讓三郎の3人は、大木喬任司法卿に直訴に及んだ。しかし、そこまで大事にされると面子が立たないの

が植村校長の側で、第5期末大試験終了後に、原・陸のほか国分高胤(畚)・友部伸(新)吉・吉田義静・宮内震志・臼田律之助ら16名を退校処分にしてしまう。退学理由は異例の無名義であり、それが後の「ナポレオンの写真」云々の伝説を生んだようである。3 しかし、この処分は23歳の原を発奮させた。後に、同期生であった寺尾亨は、「原が学校を出されたのは、本人にとって大幸福でした。あれであの俚温和しくしてれば、精々司法大臣がオチでしたらう」と語っている。末松謙澄が東京師範学校を中退したのも賄征伐が契機であったし、奥田義人も同様の騒擾事件で(東京)帝国大学から退学処分を受けている(後に復学)。ある出来事を幸福・不幸のいずれと定めるのも、その人間の心持ち次第である。

4 そして、そのことは、第2期生の入試に落ちた富井・梅についても同様で、富井は翌明治10年私費留学を決意する。一方、明治13年に第2期生の追加募集があったのも、原たちの大量退学その他により欠員が生じていたためで、それがなければ、梅や田部芳は東京外国語学校から転入できなかった¹⁴⁾。反面、梅さえ転入してこなければ、河村讓三郎は、首席卒業の栄誉を奪われずに済んだのである。

11) 〔写真出典〕菊池悟郎＝溝口白羊(共編)『原敬全伝(地篇)』(日本評論社、1922年)口絵写真。

12) その他、第2期生の詳細については、手塚豊「司法省法学校小史」『明治法学教育史の研究(手塚豊著作集・第9巻)』(慶應通信、1988年)54頁以下参照。

13) 前掲注11)63頁以下、鈴木正裕『近代民事訴訟法史・日本2』(有斐閣、2008年)31頁以下参照。

14) 東京外国語学校からの転入組は、梅、田部のほか、手塚太郎(蘭医・手塚良仙(良庵)の長男、手塚治虫の祖父)、小川鉄吉、百地宅憲、石川錦一郎の計6名である。

(しちのへ・かつひこ)